大の字形に横たわる飛行場

徳岡　孝夫
（ジャーナリスト）

西洋のことわざにも「時の蠅は矢を好む」というように、まことに時の経つのは早いものである。（ただし、この諺は Time flies like an arrow. の自動翻訳機による珍訳であって，正しい訳は皆さまご存知のはずなので略す）。　以下の出来事があったのは、今から数えてもう２０年の昔になる。

首都サイゴンは北ベトナム軍の猛攻を受け、陥落が迫っていた。前日の朝、わが支局のローカル・スタッフが「今日は残念だが出勤できません」と電話してきた。理由は「途中の道路で戦争をしていますから」という。支局長が「仕方がないね。休んでくれ」と答えるのを聞いて、私は腹を抱えて笑った。

古今東西、サラリーマンは会社をズル休みするために、あらゆる「理由」を発明してきた。「叔母さん」が何万何十万、そのために殺された。「親戚の不幸」も、いったい何百万回欠勤の口実に利用されたことだろう。

サラリーマンたるもの、絶対に「今日は会社に行きたくないから行きません」と言ってはならない。休むなら、欠勤を正当化する理由がなければならない。しかし「途中に戦争があるから」と言ったのは、おそらくこのベトナム人支局員をもって嚆矢とする。

だが20年前の4月某日の朝、この電話は笑い事ではなかった。戦線は、本当にサイゴンの通勤圏まで来ていた。支局員の電話がウソでない証拠に、ロケット弾の着弾音がひっきりなしに轟いていた。ベトナム戦争は、明日にも終わろうとしている。

その日の午後、私はビールを飲みながら戦争を眺めた。サイゴン中心部にあるミラマ・ホテル最上階のバーでビールを注文すると、給仕が目で教えてくれた。窓の外、サイゴン川を隔ててジャングルで戦争をやっていた。政府軍のヘリが高度約200メートルに滞空し、眼下の敵に何発もロケット弾を撃ち込んでいる。距離はホテルから5キロそこそこ。図らずも人と人の殺し合いをビールを飲みながら傍観することになった。罪な話だが、どうしようもない。

翌日の午前11時10分、全外国人記者を対象に、総員退去の指示がアメリカ大使館から来た。米海兵隊のヘリが Tan Son Nyut 基地まで我々を迎えにきてくれる。「万難を排して直ちに基地に集合せよ。乗り遅れたものの責任は負わない」というのだった。

ベトナム戦争を取材中、私は C130 輸送機からセスナまで、いろんな米軍機に便乗した。B52 爆撃機には乗らなかったが、機内には入った。地上では戦車のヒッチハイクをしたこともある。このヘリ搭乗は戦争取材を締めくくる最後の一仕事だった。自分がサイゴンを脱出するだけでなく、ベトナム人の祖国からの大脱走を見届ける仕事を兼ねている。

それからのことを、わたしはもう本に書いたから、ここでは言わない。まず南シナ海に浮かぶ空母ミッドウエーに着艦し、そこから第7艦隊の旗艦ブルーリッジに移った。酷暑の日でもあり、脱水症状でちょっと危なかった。だがリエゾン将校に聞くと、軍用通信に余裕ができれば艦の通信室から原稿を打電してやるという。ここが正念場と思い、疲れた体に鞭打ってポータブル・タイプライターの蓋を開けた。所持品は途中ですべて捨てたが、これだけは放さなかった。新聞記者にとってタイプライターはライフル

のようなものである。兵士がライフルを放さないように、何があっても放してはならない。

米艦だから当然だが、英語の電文しか受けつけてくれない。だが、当時「英文毎日」編集部で英語の原稿を書いていた私は、痛痒を感じなかった。脱出の一部始終、ベトナム人ボート・ピープル第一波の様子などを、詳しく書いて将校に渡した。

原稿を打ってしまえば「一丁上がり」である。私はのんびりフィリッピンのスービック湾まで運ばれた。再びヘリで米海軍基地まで飛ぶと、そこに我々より一日早くベトナムを脱出したアメリカ人記者たちが待っていた。「ワシントン・ポスト」の O 記者が、私の手を握って言った。「きみの原稿が誰より先に、この基地に届いた。すぐ東京に中継したよ。悪いと思ったが、ベトナム戦争最後の日の様子が知りたくて、みんなで拝見した。いい原稿だった。」

新聞記者仲間のこのプロならではの挨拶に、私は感動で胸が詰まった。

マニラに一泊して、そこから先は旅客機で東京の編集局に帰った。私が脱水症状の中で打った記事は、全文そのまま「英文毎日」第一面に載っていた。日本語の『毎日新聞』にも粗筋が翻訳されて載っている。その日本語の方を読んで、思わず首をひねった。

「私が大の字形に横たわるタンソンニュット空港を後にしたとき」と書いてある。おかしいな、こんなこと書かなかったはずだが、はてな？

世界に空港は多いが、滑走路が大の字形になっている空港は一つもない。理由は子供でも分かる。そんなレイアウトは、真ん中で飛行機がぶつかる危険があるからだ。だが何度読んでも「大の字形に」と書いてある。

不思議に思い英文を見ると、sprawling Tan Son Nyut Airport と私は打電していた。sprawl とは不規則に大きくなることで、都市の「スプロール現象」日本語になっている。「巨大な」とでも訳しておけばいいのに、なぜ「大の字形」にしたのか？不思議だったが、私は忘れることにした。翻訳したのは、外信部の翻訳専門の記者である。だが、いくら忘れようとしても「なぜかなあ」という疑念は晴れなかった。

ハッと気がついたのは数日後である。私はコンサイス英和を開いた。やはり思っていた通り sprawl のところに「vi.,vt.もがく；ふんぞりかえる；大の字に倒す；ばらばらに広がる、広げる」と訳が出ていた。大の字の出所は、これだ！

翻訳専門（のはず）の記者が sprawl という単語を知らなかった。もっと大きい英和辞書で sprawling を引けば適当な訳があるのに，語学力が劣るだけでなく手間を惜しんだ。そして飛行機が真ん中でぶつかる飛行場を造ってしまったのである。

外信部に行って、「しっかりしてくれよ」と文句をつけたかったが、私は黙っていた。外信部は特派員予備軍であり、社内のエリートである。何年か辛抱して翻訳していれば、そのうちワシントン、ニューヨーク、ロンドンへ晴れの特派員となって行ける。いまさら「おまえらアホか」と大阪弁で説教しても、嫌われるのがオチである。

だが、簡単な英語さえ知らない者が海外特派員になって、通用するのか？通用するのだ、日本の新聞という世界では。無駄な抵抗をするより、私は皇居の西の丸公園へ行って、芝生の上に「大の字形に」寝そべって日なたぼっこをする方を選んだ。